S.D.F.ZERO(?－?)

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｓ．Ｄ．Ｆ．ＺＥＲＯ（？－？）

【Ｎコード】

Ｎ８９３５Ｏ

【作者名】

Ｋ－ｈｅｌｌ

【あらすじ】

Ｓ．Ｄ．Ｆ．ＺＥＲＯ？、真田累編。少女ルイが壊れ行く世界で葛藤する。バイオロイド、クリーチャー、大地震の三つのキーワードが重なるとき世界は終焉へと向かうのであろうか。

序＞２０２０．５．２１

昨日、今日、そして明日と人々から平等、自由、権利の３つが失われて久しい。「私」は、もううんざりしていた。そして願った。

『誰か世界の崩壊を止めてください…』

届かない「私」の願い、知っている現実の銃声(おと)だ。あぁ、また誰かの命が奪われたか。乾いた嘆きの音が止む日は果たして来るのか。暗い路地に重い長息(ためいき)を吐き捨てた。この世界にもはや選択肢はないのだと。

０＞２０１１．５．２１

およそ3年前、ここ日本から発生したクリーチャーウイルスは瞬く間に世界中に広まり、多くのヒトを殺しました。当時の私は一ケタの歳の無知で愚かな少女でした。家族が、国が日常から消えてしまうなんて生まれてから一度も考えたことがなかったのです。それがフツーだったのでしょうね。

見渡す限りの建物は崩れ、瓦礫の国のよう。心も身体も疲れ果てたヒトが泥水に足を突っ込み瓦礫に腰掛け座っています。たぶん、そんなヒトに明日はないでしょう。崩れた瓦礫の下敷きになった肉塊からはもう蛆すら湧きません。ただの骨。同じく水中に沈むのも服を着た骸骨です。車も携帯もパソコンもみんな平等に海の底で時を止めています。ここはかつてこの国の首都だった場所。そして私が住んでいる場所はそこより北側にあるスラムです。かつての誤魔化の繁栄の跡はあの時空から降っていた灰が消してしまいました。このスラムにある薄汚さは街の壁だけではありません。3年の月日は私たちも薄汚いものに変えました。心も身体も捨てました。私は

過去と決別しました。
　なので、私はサナダルイの抜け殻です。少しだけ置き捨てにした私の過去について話ますね。私は不運にもあの大災厄を生き残り、人間の間を人身売買のようにたらい回しにされました。気付くと私は中年のおっさんの性奴隷になっていました。快楽地獄。今では思い出せないのですが、余程酷いＳＭ紛いなことをされていたようです。いまでも体中に痣と傷跡が残っています。そんな私を救ったのは、このスラムのリーダーでした。彼を私は『主様』と呼んでいます。主様は私を自由にする代わりにおっさんを殺すように言いました。私はまだおっさんに従順な振りをしてＳＭ用のロープでおっさんの首を絞めて殺しました。性欲より殺人欲の方が私には魅力的に思えたのです。主様からは他人を騙す方法や殺す術を教えてもらいました。それと、私の日常を奪ったクリーチャーを狩る方法も。でも私の心は濁っていました。正気を失った少女は素のままでも演じることができました。私の仕事は馬鹿な大人に罠を掛け、そいつから全てを奪うこと。だから、あの日も胸に悪意を抱え瓦礫の中でじっと座って待っていたのでした。

余談？＞
　「私」の名前も少女と同じルイである。しかし、決定的な違いは「私」がＰＣ型バイオロイドであり、ヒトではないことだ。ＰＣ型バイオロイドとは、人間でいう「精神」のみの存在である。言い換えると、ＰＣの情報端末に意思が芽生えたものだ。その情報端末はヒトやものに同期（パラサイト）し、過去や未来を眺めるだけの基本無害な傍観者である。さて、ここからは「私」が語り手を務めよう。同期開始。

？＞２０１１．５．２１．　（続）
　座っていたルイはここに魂がなかった。男の声にようやく気付き、猫のように身体をビクつかせた。

「お嬢ちゃん、ここはどこだい？」

ルイに微笑みかける外人紳士はこの周辺の人間ではない。はぁ？誰こいつ…ルイは間抜けな大人を小馬鹿にしつつも、いつでも事を起こせる用心はした。偽りの笑顔で答える。

「サイタマスラムだよ。お兄さんは旧北日本エリアの人じゃないね。ここはクリーチャー生息区域だから、一般人立ち入り禁止だよ」

最終警告と強がり。この言いようじゃルイを殺してみろよ、と挑発した感じだ。ここに来る人間は気違い野郎だけだ。子供でもルイは感情的で喧嘩っぱやい。背筋がぞくぞくする。

「そう？南より治安はいいよ。君みたいな小さい子が『危険区域』に堂々と座っているし」

挑発返し。この男はルイに仕掛けるだけの自信があった。そして余裕ある精神攻撃の笑み。負けじとルイは男と同じように困った笑みを浮かべる。『敗北は死だ』それがルイを殺し屋に育てた『主様』と言う人間の教えだった。それは心理戦でも変わらない。ルイはまだ強気だ。

「へぇぇ、お兄さんは南エリアから来たのね。私はあの日からずっとサイタマ暮らしよ。だからクリーチャーを見ても別に驚かないわ。その軍服はクリーチャー狩りの人なの？」

主様は『迷彩服』に気をつけろ、と再三ルイへ注意していた。ルイはわがもの顔の雑魚軍人が嫌いで、レイプしようと迫ってきたら殺すと思っていた。つまり闘いのプロだから相手にしたら面倒だ。だけど敵の見極めが生死を分かつ。今までルイが生き延びたのが何よ

りの証拠だ。

「俺は3年前に軍人止めてんだ〜♪」

ルイは迷った。じゃあこいつ何者だよ。闘うのは危険かもしれない。男は恐い笑みを浮かべ続ける。

「うーんと、君がクリーチャーに耐性があるってことは、君自身が闘えるのかな？俺と同じクリーチャー狩人かい」

こいつ駄目だ、早く何とかしないと。ルイはだぶだぶの服の袖に隠し持っていたナイフを握った。男の左腕を斬り裂く。しかし予想に反して、男の左腕の皮下は機械だった。サイボーグになんか勝てない…。戦慄のあまりルイは腰からへたれ込んだ。男は困り、手を広げて肩をすくめた。やれやれ。

「君の度胸は買っておこうかな。でも君の仲間はフルボッコ確定」

隠れていたルイの同業者は行き場をなくして男に襲いかかったが、一分もしないうちにボコボコにされた。関節があらぬ方向に曲げられてもがいている。男からゲンコツ一発。騙していたルイが悪い。

「本当に…君殺すよ？」

ルイは恐怖で失禁してしまった。色々と悔しい。涙が止まらない。男はタイミングを逸して本題を切り出した。

「ねぇ、君らのリーダーに会わせてくんない？」

ＫＹにプチン。ルイはキレた。

「この鬼ぃぃ！！女の子泣かせて何も思わないの！？」

「それとこれは別でしょうが。ていうか、そもそもの原因は君らが仕掛けた『異邦人』狩りだ。さぁ君は黙って案内する～♪」

返す言葉がない。それでもルイは喚く。

「私は君じゃない！！『ルイ』って呼べよ、この人でなし！！」

子供のあしらいになれた男の反応は素っ気ない。

「あっそ、ありがとさん。俺は『キール』だ。んじゃ道案内よろしく、ルイちゃん」

ルイはキールに口でも勝てないとわかった。まるで毒舌の有吉に金棒みたいな人だ。ルイは初対面のキールが嫌いになった。子供に加減しない感じが生理的に無理だわ。

「はいはい、案内しますよ！でも私はあんたの事、大嫌い！！」

キールは困った笑みで肩を落とす。まぁいいか。主様の地下アジトの入口までルイは無言だった。キールは最初の内はうざったくアプローチしてきたがルイの完全無視に笑っていた。ロリコンは目的を優先した、とルイは内心馬鹿にした。口八丁手八丁のキールはちっちゃいことは気にしない大人だった。同期解除。

余談？＞

０８年６月１３日の京浜大震災当時、ルイにも当然のように血の繋がった家族がいた。両親に兄が一人、ごく普通のありふれた家族。

ルイは7歳離れた兄が大好きだった。面倒見がいいわけではなく、かといって妹頼りの駄目人間でもない。勉強もスポーツも普通。ただ、その普通の兄の存在がルイにとって絶対的な安心感だった。温かさが日常的すぎてその大切さを9歳のルイは気付けなかった。時は進んで２０１１年5月２１日、今日はルイの１２回目の誕生日だった。『私はこんなところでいつまで何しているのだろう』被災により安心感を失ったルイの心の闇は今日を忘れさせていた。兄が消えた現実が時計の針を止めていた。ルイは苦しい胸の内を吐き出すように溜息をついた。今日はいつもより多いようだ。同期開始。

?＞２０１１．５．２１　夜　～

主様（リーダー）というには若すぎる眼鏡をかけた細長ノッポの青年がキール達を出迎えた。ルイの誕生日ケーキが用意されていたが当人のご機嫌はななめのようだ。主様は苛立つルイを見て首を傾げた。ルイは不機嫌に呪縛霊のように付きまとうキールという男の紹介をした。ルイがキールの悪行に尾びれ背びれをつけても主様はいつも通り、ルイは仕方なく命じられるままお茶くみに走る。ルイは無事に帰ってきた、だからキールは悪者とは言えない。主様ならきっとそう考える。理にかなった人。ルイはお湯を沸かしながらそう思った。キールはコーヒーが苦手だとかさっき聞いたので、とびきり苦いコーヒーを出そうかと魔がさした。でも止めた。一応あいつは客人だし、あいつの前で主様から説教食らうのもルイにとって最悪の屈辱だ。時間がないのでさっさと湯呑に注いで2人のもとへ戻った。先程とは違う異様な空気だ。キールはしらーっとした調子だが、主様の額には脂汗が滲んでいた。こんな思い詰めた主様の顔は初めてだ。主様はルイが差し出した湯呑をすぐ口に付けた。キールはカフェイン系が苦手らしく放置。防戦一方の主様は再度キールに聞き返した。

「もう一度お伺いしますが、本気でおっしゃってますか？」

たどたどしい主様と違いキールには余裕さえ見える。

「俺は本気さ、ルイを俺にくれ」

持っていたおぼんで引っ叩いてやろうかと思った。ロリコン野郎は気違いか。主様のやつれた目と合う。この人は自分より思い悩んでいる。所詮他人の不幸なのに、馬鹿馬鹿しいわ。先の見えない現状に苛立ったルイはキールを問い詰める。

「で、何で私なの？私はあんたの思うままのクソガキですけど！」

ルイの座った目をキールは逃がさない。いつになく澄んだ空色の瞳があった。

「未来の可能性かな。そしてルイは限りなく非合法な事が出来ると思ったからだね」

意味不明。ルイは眉間にしわを寄せた。キールは例の困った笑みを浮かべる。

「難しい話はしてないよ。南で捕まってる仲間の脱獄のお手伝いをして欲しいのさ」

「へぇぇ、テロリストか政治犯の救出かしら」

ルイは的を射た。そしてあらか様に馬鹿にしている口調が、表情からは読めないがキールを本気にしたらしい。

「そうだ。別にお前でなくてもいい」

投げやりな感じだが、十分に苛々が伝わってくる。主様は話題を変えようとした。

「ルイ、せっかくの誕生日だ。ケーキでもどうだい」

「いらない！！」

タイミングがずれた思いやりがルイには重かった。今まさにルイを売ろうとしている人間をルイが信じることは絶対に出来なかった。非日常の中で生きていることを実感してルイは主様を拒絶した。泣きたい。死にたい。ここはもうあの温かい場所じゃない。同期解除。

余談？＞

ここで一旦、ルイの人間関係を整理しておこう。

？真田奈悟（サナダダイゴ）ルイの実兄。０８京浜大震災の時に時間断層へ落ちてタイムスリップしたらしい。？ガスト・キール・トッシュ　かつて電流を武器にして闘うスラムのリーダーだったが、時間断層へ落ちて能力を失ったらしい。ユウナという少女に何かひかれるのか、いやただのロリコンか。？玄野壱生（クロノイッセイ）別称、主様。サイタマスラムのリーダー。半死半生の霊能力者とのうわさ。

結果としてだが、主様はルイをキールに売った。私が思う非日常の中の日常では、『人身売買』なんてありふれたことだ。キールはルイを道具のひとつくらいに思っていたのだろう。ただ、ルイの闇はさらに広がっていた。時に逆らえず、少女は無理やり大人になっていく。同期開始。

？＞２０１１．０５．２７

新潟から小型船で２人は南エリアへ密航した。武器を持った兵士と

キールは話していた。ルイは脱北者と呼ばれ、彼らに奥下の部屋へ追いやられた。ルイはキールを信用していなかったので暴れた。肩の関節が外されて抵抗できなくなるとルイはついに諦めた。キールにも知らない誰かに売られるんだろうな。積荷に背を預けて座りこみ、憂鬱を溜息にした。そこへ若干疲れた顔のキールが甲板から降りてきた。

「日本が関西で真っ二つだ。もうここは南日本」

「・・・」

キールは蝋人形のように無反応のルイを見て、面倒くさそうにぼりぼり頭をかいた。ばきり。ルイの両肩ははまった。それでも声を上げないルイに及第点。

「なんで東京の主様を裏切った？」

キールの意外な問いにルイの心が戻った。権謀術数を操るキールに目論見があることは見え透いていた。それは許せなかった。ルイは怒った。

「言いたくないし、特に理由なんてないわよ」

キールは子供に馬鹿にされるのが嫌いだ。困った笑みの向こうに怒りが見える。

「そうかい、じゃあそのままもやもやした気分で死ぬといいぜ」

ひどい皮肉だ。ルイはギッと睨み返す。

「あんたが無理難題言ってくるからでしょ！！そんなにあんたは偉いわけ！？」

キールは慌ててルイの口を塞いだ。密着する成人男性の身体にルイの耳は赤くなった。騒ぐと上にばれちまう。ルイもこの癇癪に少し責任を感じていた。条件反射でシュンとした。ややあってキールはルイを離す。そしてクククと笑う。

「ルイは偉そうな大人が嫌いか…本当に何にも染まってない…ククク」

子供と馬鹿にされたようだ。ルイはアヒル口になった。つぶやくように繰り返した。

「子供じゃないもん、子供じゃないもん」

「そうかい、これで大人の仲間入りだ」

キールはいつもの陽気に戻ってルイの手足の枷を外した。ルイは何となく他の脱北者の気配を感じた。ただそれは人間らしい生気を発していなかった。人形は2人のやり取りに無反応だった。

キールはルイに『もっとけ』とずしりと重い何かを手渡した。ルイは息を呑んだ。主様に『ルイには早いと止められていた武器』…銃器だ。特にキールから使い方の説明がないようだ。ルイパニック。

「わわわ、私じゃない他の人に使わせたら？」

キールは呆れて天をあおぐ。

「ここに俺とルイ以外の人間はいない。お前に目があったら、両手両足の腱を斬られた人形が転がっているのが見えるはずだ。つーか、お前がほぼ無傷なのは俺のおかげだぜ。奴らは女子供でも半殺しにする暴力ジャンキーだ」

現実に神経が拒否してせき込む。人間の所業でない。みんな馬鹿。ルイは唇をくっと噛みしめた。キールは場違いに笑っていた。

「さぁ、この船に乗る悪魔どもを駆逐しようか。甲板の上のクソ共をさっさと始末しよう」

つまり人間同士の殺し合いをするということだ。ルイは臆病風に吹かれて怖気づいた。説明もそこそこにキールはさっさと昇っていった。これまでルイはクリーチャー相手に仲間と戦ってきた。他人と殺し合った経験がない。もう口からは何もでない。泣きたくても、止めたくても、叫びたくても、逃げたくても、現実はルイを待ってくれなかった。身体が鉛のように鈍く、汗がにじみ出る。幼い心臓は破裂寸前だ。

ルイが甲板に飛び出したタイミングは最悪だった。キールは武装兵2人と交戦していて、ルイの援護どころでなかった。というか、事が終わるまで下に隠れていて欲しかったというのが本音だった。キールはここにいない少女とルイの能力を測り違えていた。その思い込みがキールの油断だった。ルイには護身用のハンドガンしか渡していない。

一斉射撃の中をルイは転がるように逃げた。何も考えている余裕さえない。物陰に逃げ込んでルイは本当の戦場の恐怖に身を震わせた。最初は『恐い』の恐怖一色、追い駆けてきた兵士の馬鹿にした声に『怒り』が込み上げてきた。『私を楽に殺せると思うなよ！！』怒

りの頂点になったルイは腰から銃を引き抜き、引き金をひいた。かちり。血の気が失せて気付く。これが安全装置ね。無駄撃ちは敵に気付かれる・・・昔、兄がゲーム画面相手に独り言を投げかけていた。目を閉じて、人の気配に集中する。しかし、敵は形振り構わず掃射してきた。壁からの跳弾がルイの頬を掠める。血。ルイはキレた。瞳孔が縮まったまま、引き金を引き続けた。思わぬ攻撃に固まった兵士は、後ろの扉から挟み撃ちにしてきたキールの銃撃も受けて血花を咲かせた。ルイはキールの容赦ないグーパンチで目が覚めた。

「馬鹿野郎！敵味方関係なく撃つな！！つーか、根性もないへたれが甲板に出るなよ！！」

ルイは緊張が切れたのか大声で泣き出した。だからガキは面倒だ。キールは軽く溜息。妹と似ているんだよな。

「でも、予定通り皆殺しってことだ。初陣お疲れだ。処女喪失かな、おめでとさん」

『処女』に突っ込む気力もないルイだが視線だけ送る。キールの指さす方向に頭の半分が吹っ飛んだ死体が転がっていた。本当はキールが殺したと思ったが、ルイへの嫌がらせの意味でわざと見せたのだろう。当然ルイは吐きだす。無理もない。

だが現実はルイたちを待ってくれないようだ。迫りくる足音。

幽鬼のような声がルイの口から吐き出される。

「皆殺しにしたんじゃないの…」

「残念ながら、南の海軍さんが乗り込んできたらしい。大人しく降参しようぜ」

キールらしくない弱気な発言。にやけながら顔で手を上にヒラヒラさせる。

吐瀉物と涙でぐしゃぐしゃのルイは罵った。

「笑わないでよ！あんた無責任過ぎよ！！」

「はいはい、ガキは黙れ。これは作戦通り」

「捕まったら何も出来ないわ！！」

「いいや、トリプルA級刑務所に入るのが目的さ。ユウナを奪い返すのに好都合だ」

私から言わせてもらうとキールはかなり能天気だ。その場で射殺されたり、別の留置所送りになったりは考えないのか。おそらく、伊達に何年か計画したわけじゃないのが自信の根拠だろう。ルイは生きるだけで精一杯だったこの数年間を後悔した。刑務所イコール死罪だ。一方でキールはまだ余裕があった。2人の感情は対極だった。それはあながち間違っていない。同期解除。

余談？＞現時点で私が突き止めたキールの尋ね人の『東雲有奈（シノノメユウナ）』という少女についてだ。父は生物学の権威。幼い頃に母親を亡くし、大人びいた考えを持つ娘になった。研究者の父親を尊敬していたが、自分の身体が父の実験体となっていた事実を知り父と決別する。父の研究する『新生物』つまり『新人類』の誕生が世界を恐怖に落とした『クリーチャーウイルス』と『第三次世界大戦』に繋がること

を未来人のキールから伝えられ、父と闘うことを決める。元々ある天才的知力と改良された彼女の運動能力は、陸軍一個小隊を瞬時に壊滅させるくらいと見積もれる。しかしなぜ教授を追わず、南日本に留まっていたのだろう。孤独と才能がヒトを腐らせるというのか。一介の端末の私には、彼女ら人間の本質がわからない。さて傍観を続けよう。同期開始。

?＞２０１１．５．２８

何時間くらい監視付きの狭い箱庭に閉じ込められていただろう。ルイは寝ても起きても監獄の中で、気絶するように寝ていたらしい。ウンザリ。キールは廃人のようにブツブツ言っていて、何だか薄気味悪かった。キモい。

夢から覚めて正気に戻った。キールはルイに言った。

「そろそろ岡山に入ったか…準備してろ」

「何の意味があるの」

監視員が一瞬目を反らした。いつの間に枷を外していたキールは彼らに襲いかかる。ルイは海外映画のような意味のない暴力シーンを連想した。とりあえず身を低くして彼らの視界から消える。まるでタイミングを謀ったように箱は傾いて倒れた。身を低くしていたおかげでルイは何とかなった。のびてしまった監視員は衝撃のまま壁に体当たり…きっとどこか骨折だろう。キールの呼応に鈍い音を立てて箱のドアが開く。待っていたのはルイより若干年上に見える二つ結いの黒衣の少女。口が笑っていたが目に生気がない。どうしたらあんな濁った眼で他人を見られるだろう。ルイはその人が嫌いだと初対面ながら思った。感情のない少女の声が出迎える。

「南日本エリア倉敷特別収容所へようこそ。不法侵入者共」

ルイの気持ちを余所に、キールはへらへら笑っていた。この人はもっと意味不明。少女に何も言わずに殴りかかった。それより早くキールの額に銃口が突きささる。

「遅い…二年も待たせるとは飛んだクソヤローだ」

キールは素手で銃身を掴み、銃口を外す。この時点で楽しい再会はないとルイもわかった。

「クズはお互い様だろう、ユウナ」

沈黙が不気味に続いた。お互いが言葉を失った人形のようにニコニコ微笑み合う。ルイは呪い人形を見たように感じて思わず目を背ける。ややあって、ユウナという少女はくるりと反転し箱から降りた。続いてキールもさっさと降りる。なぜかルイにはこの狭い箱庭の方に安心感があるように思えた。キールの催促する声に慌てて降りる。たぶん気のせいだ。ルイと違い私は何か違和感があった。それはPC媒体の私が統計的に感じる誤差程度だ。

外へ出てみると護送車が派手に横転していた。アスファルトに明らかに燃料でない赤い液体が流れていた。ルイは考えるのを止めた。さくさく歩く2人の後を追う。

ユウナという少女は一体何者だろう。本当にキールの仲間なのか。ルイはユウナに不信感を覚えた。その彼女が歩くと通りすがる受刑者も獄吏も作業を止めて頭を下げた。一介の受刑者ではないなぁとルイは慄いた。絶対王政。私のイメージだ。キールはへらへらして

いる。よくも悪くもプレッシャーに強いようだ。

すでにキールは異変に気付いていた。何気なく言ったのは、不安を誤魔化すためだろう。

「俺らをどこへ連れていく気かな？」

ツインテールの綺麗に分けられた後ろ髪が短く答える。

「さぁ？」

「お前はここでどれだけ偉い人間だ」

質問はストレートすぎて無理がある。

少女の歩みが止まった。小さく鼻で馬鹿にした笑いが聞こえた。少女の二本のテールが揺れる。

「クハハ…遅いよ、おせえんだよキール・トッシュ」

ルイはまだ状況が読めていなかった。キールの顔を覗き込む。阿修羅のような形相だ。こんなキールは初めてだよ。

「正解は、お湯がほしいな…だ」

何それ、怒りながら言うことじゃないし。ルイもそう思いつつも何となくわかった。ぎこちない笑顔。それに他人行儀な会話。まるで初対面同士の腹の探り合いだ。この人は『ユウナ』ではない。至って簡単な答えだった。

キールはいつも通りを演じていた。ただし、言葉の端から生気を感じない。

「いつ死んだ？」

「二年前だよ…博士がいうには、人類はもうお終いだそうだ。実験は完了したってさ」

くるりと振り返った偽物は、本当に可愛い笑顔を向けてくれた。キールにとってそれがどんなに屈辱だったか想像できない。博士と闘える唯一の存在ユウナを失った世界。やがて戦争が起こり、キールの未来になる。がくりと肩を落とし項垂れる。

ルイは吐き捨てるように言った。怒髪天。

「あんた誰よ！！」

そいつは感情のない目でルイの腹を蹴り飛ばした。痛い。ルイは蹲ってうめいた。すでに周りには騒ぎに駆け付けた武装兵。逃げ場はない。そいつはルイの髪を引っ張り上げ、地面に顔を押し付けた。

「庶民が黙れ。いいだろう、答えよう。僕は大韓共和国総督代行、如月鐔葵（キサラギツバキ）だ。ここでは僕が絶対だ。お前らの人権もくそもない」

またルイは土の味を噛みしめた。キールは何も言わずに手を上げて降伏した。もはやキールの心は死んでしまっていた。同期解除。

余談？＞如月鐔葵は、本名を『陸葵』と言う。中華帝国の第１６皇子で、大韓共和国総督代行とされる。如月家は帝国皇室の分家で特殊な『水術師』が多い。この世界のツバキが『水術師』なのかは、

まだ調べる必要がありそうだ。あぁそうそう、彼は女装趣味ではなくて一族争いの関係で女の子として育てられたらしいから、服装や髪形が少女くさいのは『習慣（クセ）』だ。ハハハ、まさに『くせ者』だ。同期開始。

?＞2011．7．19

帝国の先鋒として大韓共和国は復興支援の名の下、南日本エリアを完全支配していた。ルイ達は共和国に移送されていた。非道極まりない話だが、ルイはツバキから性的な虐待を受けていた。ツバキは『少女というカテゴリーは嫌い』という自分の『性癖』と逆行する変人だった。そのサド貴族に調教されたルイは、三週目には反抗する気力を無くし主人に従順なペット化していた。かつて性玩具として生きた屈辱をルイは忘れていた。痣や傷が身体に刻まれることで自分が生きている実感を得られた。快感。もうルイは人の心を失っていた。

時間は11年の7月中旬に進む。ルイは牢の中でヒトとは思えないうめき声を上げていた。外は雨らしく牢の天井から雨漏りしていた。ガシャン。牢が乱暴に開く。今日もお時間ですか、ご主人様。ルイの焦点は合わない。世界がぼやけている。フードの長身の男。ご主人様ではないけど、ルイは我慢できず犬のように口から唾液をだだ流す。しかし、その男はルイを叩きも罵りもしない。男の手には血のついたナイフ。あぁそうか、あたしもいらなくなったのか。力なく笑う。家畜が殺処分されるだけよ。奇妙なことが起こった。男は自分の手首をリストカットし、ルイの顔面に血しぶきを浴びせた。

「な、何するんですか…」

「無様、ルイ無様だ…ククク」

ボサボサの頭をその男に向けた。一瞬の内に記憶が逡巡した。堪え切れない涙。

「うぅ、キール…遅いよぉ」

「たく、くそオカマの牢は脱獄がキツイぜ。まさか俺がこんなに時間食うとはね。全くいけねぇオカマだ、俺のルイをこんなにしやがって・・・」

『俺のルイ』信じていいのかな。ルイは涙目で微笑む。そういえば、そのオカマはここ数日ルイの前に現れなかった。

ルイの知らない間に世界は進んでいた。キールの話によると7月17日、南日本エリア各地に前触れなくクリーチャーが出現した。当然駐在している共和国軍がこれに応戦。しかし、奴らの不規則な動きとその多さに次々と南エリア保護区は陥落。共和国軍本隊が出兵するに至る。がら空きになった共和国内でキールが暴動を起こして、内乱状態になっているらしい。

「今頃、北部ゲリラと旧日本人が暴れまくっているだろうよ」

ルイはキールに返事をせず、頬を膨らませた。キールはあいつの罠にはまった日と違い例の困った笑みを見せる。

キールはコスプレ武装服をほぼ裸のルイに差し出す。人に戻ったルイ。自分の姿は楽園追放前の痴態に気付かない神と同じ。やかんの急な沸騰。

「へんたい、へんたい、へんたーい!!見るなロリコン!!」

「遅いのはお前もだろ。俺は蚯蚓腫れの裸体に萌える属性ない…つーか見るのも痛いから、黙って服着とけ」

はいはい。テンポが合わないのは久しぶりだからかな。ルイは着替え終わってから気付いた。このタイミングはノリ突っ込み。

「…なんで拘束衣なの。アメリカンジョークにもならないわよ！！」

「名実ともに気ついた姫ちゃんに怒られるのも悪くないね♪」

ふざけた調子は相変わらずだ。キールは血糊をふき取って、ルイにナイフを渡した。あたしの武器、覚えてくれていたんだ。しかもルイの手の大きさにしっくりきた。些細なことだが、ルイは嬉しくてキールに背を向けて涙ぐんだ。この男、妙なところで気が利くんだから。

慟哭の雨が街に鳴き叫んでいた。景色が淡い色に霞んで見えた。音がかき消される街で間違いなく血は流れる。自分はその当事者だ。このナイフは深紅に染まる。現実はいつも正直だ。軍用車両から共和国軍服のキールが降りた。かつかつ規則正しい靴音がキールらしくない。ここが非日常の中であることを教えた。

「そろそろ時間だが、最後に一つ聞いておく。お前はまた戦場で闘えるか。何があっても前に進むか」

「今更何よ。それに選択肢はそれだけなの？私は私の選んだ道を進むわ。もし足でまといになるようだったら、殺してもいいわよ…覚悟はあるんだから」

ヒトを殺すことは理由があっても許されないし、後戻りできない。幼い知識でもそれだけはわかる。ただ、この世界は残酷すぎた。生

きても死んでも同じなら、いっそぶち殺してもいいのだ。

「じゃ、いきますか」

いつも通り軽いキール。逝きませんけど、生きますよ。ルイは心で答えた。車両に乗り込む。

ハングルのラジオ放送が車内に流れている。ニュース速報、国内数か所で同時多発テロ。一部国務大臣らと連絡が途絶えているらしい。ハングルはくそ皇子のせいで覚えてしまった。目の前で対面して座る彼らは、北部ゲリラ部隊の同胞とかキールが紹介した。無言のままでも彼らはルイを『こいつ使いものになるのか』と疑いの目で見ているに違いない。ルイは軽く唇を噛みしめた。『もう同士撃ちなんてしないわ』ルイはあの時キールの脚を撃ってしまった。でもキールはその後連中に逮捕されて普通に歩いていた。また何か隠している。ルイは少し嫌な気持ちになった。キールは韓国人ゲリラの運転手と何か話している。普通の光景だ。これが普通なんだ。いや、これは普通じゃない。ルイは苛々して、そでの内でナイフを弄んだ。それを見て、ゲリラの連中は眉をひそめた。いい気味だよ。心の内でルイは嘲った。

他人は裏切る。だから裏切る前に殺す。ルイは銃を構える治安維持兵を容赦なく殺した。クリーチャーに比べたらヒトは遥かに弱い。ヒトの弾丸は単調な軌道でルイに全く当たらなかった。一瞬でヒトの命を奪う狼の牙。ブラッディーウルフ。

「覚えたての言葉だって、君に突き刺すナイフ♪切り裂く生命(ライフ)♪」

痺れるような感覚。ルイの理性は飛んでいた。

彼女に近づくと仲間だろうが、一般人だろうが殺されるとキールはその残虐を評価した。大通りは狼の牙で血の雨が降っていた。そして彼女との距離は徐々に離れていく。仲間からしたら無謀な猛進。いっそ二手に分かれた方が安心か。

ユウナならまだしも、仕方ない決断か。戦闘音の中、キールは叫んだ。

「ルイ、お前はそのまま大総統邸を目指せ！俺らは迂回する！」

「先にキサラギの首を落としたら勝ちだね♪」

戦争はゲームじゃねぇよ。ユウナは勘違いしたまま死んだ。お前も同じか。キールは困った笑みを残した。

殺しにはリスクが伴うこともある。今のルイはヒトの皮を被った殺人鬼だ。

「弱い、弱い、なんて脆弱なの。みんなさっさと死ね！アハハハハハハハ！！」

リスク。死にもの狂いの人間がルイに付ける僅かな傷。ルイは首や手足の動脈をかき切って死体と動かないものを残して進んだ。しかし、確実にルイにもダメージは蓄積していた。

「あれ…おかしいな。もうすぐあいつを殺せるのに。なんであたしが死にそうなのよ」

大総統邸に突っ込むには、目の前に盾の壁を築く共和国軍を蹴散らすより他はない。ルイにもわかる無謀な猛進だ。瞬時に蜂の巣にさ

れる自分の姿が映った。

「はは…死んじゃおうか。もうこんな世界いらない」

「じゃあ、私がナイフ放つ前のその唇をこの唇で塞いであげましょう♪」

盾の向こうで場にそぐわない愛らしい笑みをツインテールの女装娘は見せる。ルイは泣き笑い。相対中。殺したい奴が目の前にいるのに、ナイフは錆びついた。

「実をいうとこのクーデターは自作自演さ。父である総督を幽閉するためのね」

「なるほど、そういうことね…あたしがあんたの代わりに死ねって言うの？」

「馬鹿のくせに、ご名答」

パン。乾いた狙撃音。ルイは腹部から生温かいものを噴き出すのを見た。崩れいく景色に銃口を向けるキールが立っていた。あぁ、そういうこと。死に神のカードはやはり信じたヒトだった。

「これで契約通りだ。反乱軍は全員武装解除し投降する」

それは誰の声かわからなかった。もういい…あたし死ぬからさ。身体より心が痛い。同期解除不能。そんな馬鹿な。

余談？＞０８リプレイ

幸いにルイは死んでいなかった。同期解除できなかった『私』はル

イの夢に引きずり込まれた。０８．０６の悪夢だ。それより前は平凡な日常の連続だった。ウンザリの連続。ルイの兄（ダイゴ）は相変わらず引きこもり。兄の親友の泉士紀（イズミシキ）がドアベルを鳴らし、プリントを置いて帰る。兄のせいで父と母の関係は依然よりも増して、ギスギスしていた。会う度に口げんかしていた。ついにルイはこの空気に耐えられなくなった。２００８年５月２１日、ルイの誕生日だった。兄の部屋の鍵を針金で外して怒鳴り込んだ。

「今日はあたしの誕生日なのよ！いい加減にしなさいよ、くそダイゴ！！」

部屋は最抜けの殻。残骸はゴミ袋にまとめられ、思ったよりも綺麗に片づけられていた。普通すぎるよ。窓が開いていて、夕日が部屋に注ぐ。風がカーテンを揺らした。どんなに不幸に落ちても変わらない日常。そんな兄を改めて自分は好きなんだとルイは思った。信じられなかった自分が悔しくて涙が流れた。その日のことは何もなかったことにした。当然兄からのアプローチはなかった。

そして、６月１３日がやってきた。兄のせいで家庭は崩壊、小学校でもいじめのネタにされる。あたしって何のために生きているのだろう。９歳の絶望と葛藤。こんな世界滅んでしまえ。そうなれば気が楽になるかもしれない。

ルイは学校へ行く振りをして、いつものように公園の青いベンチで時間を潰していた。学校が終わるまであと1時間くらいかな。もうすぐ2時、あいつらと入れ替わりで学校に行く毎日だ。保健室の住人から一歩後退した精神状況がその当時のルイだった。あーあ、今日も先生にいい訳できないなぁ。蒼すぎる空が恨めしい。つまらない。何かぐわんぐわんとセミみたいな音がしてきた。あれ…って、えっ！？縦揺れが襲った。公園の大木が揺らいだ。はっぱが散る。

異様にざわめく。

「な、何これ、地震！？うあぁっ！！」

第二波は横揺れだった。ルイの小さい身体はベンチから吹っ飛ばされた。地面に叩きつけられる。２時０１分、京浜大震災が発生した。

ルイは奇跡的に自衛隊員に近隣の避難所まで運ばれた。目が覚めた時に地獄が映った。腹から血を噴き出しもがき苦しむヒト、首に針金らしきものが刺さって意識不明のヒト。それ以上はルイの目にフィルターがかかり見えなかった。自分の名前を呼び掛ける声で自我をようやく戻した。

「ルイちゃん、ルイちゃんだね！よかった、生きていたんだ、よかった」

兄の親友のシキ。ほこりにまみれた眼鏡のひょろ長い男。ルイは知り合いが近くに来てくれたことを素直に喜んだ。

イズミシキは幼いルイを支えた。緊急伝言ダイヤルでルイの家族へ安否を入れてくれた。そんなことしても無駄なのに。世界の変わり様をルイはシキより冷淡に受け止めていた。案の上、ルイの家は潰れてなくなっていた。ほら、安心できる場所なんてないのよ。シキは下宿暮らしなので、福島の実家に戻るといった。ルイちゃんも来たらいいよ、俺の家族も歓迎するさ。明るく振舞っているのだろうが、声が上擦っている。それでもシキはルイを守り抜きたかった。

なかなかトウキョウから脱出できない状況が続いた。妙な生き物が被災者を殺戮しているやら、川が氾濫してトウキョウが孤島になっているとか、デマが足を殺した。実際、北への脱出ルートは旧江戸

川の氾濫で潰れた。それに併発する火災も行く手を塞いだ。自衛隊や消防、警察も全く機能していない。被災者は完全に疑心暗鬼に陥っていた。

3日後、止めを刺される。富士が噴火した。南から逃げてくる人間で更に混乱は極まる。逃げてくる人間に合わせて、化物もやってきたのだ。

「必ず戻ってくるよ」

シキはどこからか現れたおっさんにルイを預け、被災者の元へ走って行った。あんな化物のところへ走っていくなんて、お人好しを通り越して、ただの馬鹿だわ。最悪の予感は当たる。巨大な地割れが起きた。断層にシキとルイは引き裂かれた。化物はもう追ってこない。でもシキも戻ってこない。さっき言ったじゃないの、必ず戻るって！！

「フザケンナァァァァ！！」

確かにあの時ルイはそう叫んだ。全てを奪い取った世界は許せない。このふざけた世界への怒りだ。

?＞２０１１．０９大韓共和国・釜山

「ふざけるなぁぁぁぁ！！」

目覚めたのは、あのトウキョウの地獄ではなく、普通のベッドの上だった。ハングルが目についた。ここは病院なのか、それとも夢か。まだ寝ぼけていたルイはナースコールを押していた。ツーサイドアップの女装ナース。あぁ、ここは現実ね。夢の方が１００００倍嬉

しいかも。ウンザリ。

「やぁ、目が覚めたかい。無理もないさ。一か月振りの復活だ」

「あっそう、三途の川じゃなくて地獄を彷徨っていたわ。ここ結構いい病室ね。あたし一人隔離して何になるの」

ルイの問いにツバキは曖昧に微笑むだけだ。ホント腹立つくらい可愛い仮面だ。もし男の子だったらこいつの身体を犯していた。

「キールにお前を撃たせてみたんだけど、お前は本当に『不顕性感染者』らしいよ」

あんたの手引きだったのか。ルイはしかめっ面を返す。

「あたしが何だってさ」

ツバキは夜這いのように布団に圧し掛かる。

「お前は『クリーチャー』の出来そこないだよ。あの日の暴走は覚えている？」

ルイは心の内が冷やりとした。声がでない。唾液が無くなってしまったのか喉が乾き焼けつくようだ。ツバキは微笑み続ける。

「覚えてないのね。お前に殺傷されたのは３２人だ。これは人権問題とか、傷害罪とか言ってられないんだ。闘いのプロがたった一人の少女に壊滅させられた、なんて国家の威信が落ちるだけで済まないからね。だから僕は君にムラムラするんだよね」

脅しだ。ルイはここで言葉をミスすると自分の首が吹っ飛ぶと思った。ここは冗談で流してみようか。

「あたしの強さに今更気付いたの。それも欲情するくらいに」

「くはは、さぁ？だって君まだ完全体じゃないし」

微妙なリアクション。そう言って、彼は白衣のポケットからルイのナイフを取り出した。柄の方が差し出される。

「僕を殺して血を飲むかい。それとも君を裏切ったキール殺して血を飲むかい」

目の前が暗くなった。こいつらはやっぱりあの化け物の感染者だった。サイタマにいた頃、クリーチャー感染者の末路を多く見てきた。狂人化して仲間を殺しだし、銃で撃たれても怯まない。どす黒い液体を流す化物の類似体は、脳天を破壊してようやく死んだ。恐怖で胃から戻してしまいそうだ。こいつらは人間じゃない。そしてあたしもヒトでなくなりかけている。現実は性急だし、即決を求められる。

「あんたの精液飲まされ過ぎたせいよ。血を飲む嗜好はないわ」

「じゃあ、ここでエッチする？」

「ち、違うもん。そんなの変でしょ」

「それは残念」

猫のような笑み。ツバキはベッドの端に座り直した。あたしは何を

望んだんだろう。咄嗟に叫んだ言葉に自分で動揺していた。

「相変わらず君は馬鹿だね。くはは、今まで何人の男に騙されたんだい」

ツバキは図々しく土足で心に踏み込んでくる。ルイは腹がたって仕方なかった。

「あたしは男運ないの。あんたにそれ以上答える義理はないわよ！」

「ばか正直に生きてきたからさ。僕ははっきり言って君らの話そのものに興味はない。もちろんユウナの話もさ。僕が何をしたいか教えてあげるよ。父を含めて帝国をぶっ潰す。妹を殺した帝国から、権力、名声を全て奪った後で…」

ツバキはルイからナイフを引っ手繰った。

「破壊？」

ナイフは膨張して爆ぜた。ツバキの手のひらから血が滴る。

「嘗めるかい」

目が爬虫類のように不気味だった。これが覚醒者の能力と言えるのか。ヒトだったら…なんて考えたくもない。喉が鳴った。

「あぁ、そう？じゃあ、君の頬から流れる血を嘗めさせてもらうよ」

ルイは爆発に意識が向いていて、自分の頬が切れていたことさえ気付けなかった。悪い意味で夢中にさせられた。可愛らしい女の子の

ようなツバキがただ恐い。頬を嘗められて背筋が凍るようだった。幸いにそれで彼は去って行った。『あたしも完全化するべきか』決断は早い方がいい。わかっている。でも決められないんだよ。恐怖がルイの思考を麻痺させていた。同期解除。

余談？＞ルイが気絶していた間に世界は激変してしまった。第四号クリーチャー掃討計画が国連軍により始まった。８月中旬までは旧福岡、旧広島、旧名古屋エリアを韓国軍が奪還した。しかし８月１９日、新たなタイプのクリーチャー出現により事態は急変した。実弾兵器無効化タイプ。さらに翼手タイプがこの能力を持ったため、空軍は壊滅的打撃を受けた。結果として南アジア一帯までクリーチャー感染が拡大し、国連軍の中心の中華帝国の威信は地に落ちた。旧南日本では０８年以来の『死の９月』再来である。同期開始。

？＞２０１１．０９．３０佐世保

キールは悟った。ついにバイオロイドの日が来てしまったのだ。この国連軍敗退から類推できた。

「俺もそろそろか」

キールは本来ならば４歳で遠くアメリカの大不況の中で生きている。恐らく「時間」が消すのは、不自然なこの俺だろう。だから俺の意思を次いで欲しい。

共に行動した感じツバキという青年は中華帝国の傀儡に過ぎない。それならルイに託すか。ユウナという亡霊に捕らわれていない少女。驚異的な回復力で目覚めたと聞いた。ルイはキールを憎んで当然だと思う。

ユウナの血液サンプルを突然変異させた輸液を半死状態のルイにぶっ掛けた。それで実弾で試したのだ。アホな皇子はさぞがっかりし

ただろう。もうそろそろエアメールがルイの手元に届いた頃だ。さぁ「時間」さんよ、どう動く？同期転移。

ルイは日本に帰ってきた。待ち合わせ場所は港近くの崩れた壁の下。キールの言葉はいつも足りなかったり、意味深長だったりする。ルイは今まで大人から見て子供らしく演技して生きてきた。それはキールと会って変わった。常に自発的行動を求められる。大人の意味で騙すか、騙されるか。アクターになる必要がない分、気持ちは楽だが相手が悪い。さて、幸いなことにルイが腰掛ける壁はキールの指示と同じだった。

「この壁は3年前にクリーチャー共が南のヒトをぶち殺しながら歩いた跡じゃないんだ。クリーチャーと闘うためと大義名分打った国連軍の破壊の跡さ。そもそも佐世保は、唯一クリーチャーがいない非民間人の居住区だったしな。つまり、軍用施設。真っ先に敵さんが攻撃してくる場所だった。敵に見つかる前に自爆さ。人間がヒトの手でこの一帯を焼き払った。狂喜の沙汰だぜ」

「・・・」

「あれれ、お前がそう言うか！！とかないの」

キールは肩をがっくりと落とした。あの馬鹿皇子の方がまだマシに思えた。キール相手だと、怒りの矛先がなかなか定まらない。何と表現したらいいの。ルイの鋭い視線を例のニヤニヤが迎える。

「すべてがここでまた再会するための計画だったって言ったら怒る？」

「どうせまた馬鹿にされるだけだから答えないわよ」

結局、ルイが死んでも生きてもよかったと言うに違いない。きっとこの男は、ヒトの命に飽きているんだ。だから、もう口を塞ごう。

「俺と皇子をはかりにかけたか。どうやら株価が大暴落の様子だ」

ここで力なく笑うのは卑怯だ。結果は生き残ったからいいでしょう。それとも裏切った上に殺されかけた。ルイにとって、キールを許すか、許さないかの二者択一は嫌だった。頭の中をかき回される。ローリンガール。項垂れたルイにキールはミルクキャンディーを手渡した。これで買収したつもりなのか。ルイに子供騙しは通用しない。

「総督に会ってきたよ。そいつはお土産」

総督はツバキの父親だ。ツバキが妹の敵と憎むヒト。ルイは口を横に結んだ。羨ましいんだ、ツバキの妹さんが羨ましい。

「ツバキに同情するか、また痛い目見るだけだぜ」

嘘だ。違う。ルイは叫んだ。

「お兄ちゃんは悪い人じゃない！！」

キールぽかん。今度はキールが言葉を失った。本当に焦っていた。ルイと自分の妹がダブって見える。あのとき、妹の手を離さなかったら俺はお兄ちゃんでいられた。だがルイは泣かなかった。

『ごめんなさい…お兄ちゃんは3年も前に報いを受けて殺されたのに…あたしはその棺をひきずっているのね』

自然災害で『殺された』と『死んだ』じゃ、意味が分かれる。愛情が憎しみに変わる時、妹の真開いた眼が恐ろしく感じた。これは幻だ。キールが一旦瞳を閉じて開くとルイはしょんぼりしていた。

「飴おいしいよ…」

「そっかそっか…」

ルイはつい癇癪を起したことで、キールがここまで落ち込んでしまったので申し訳なくなった。お菓子すらまともに買えないご時世だ。飴は貴重品だ。ルイはもっと素直に喜べば良かったと後悔した。気まずさが残って、それ以上キールと話すことは不可能だった。自分を情けない奴だと思い悩んだ。同期解除。

余談？＞関門海峡奪還線は博多攻防戦のように上手くいかなかった。海上では船が鉄くず同然だった。翼手タイプのクリーチャー共は船にミツバチのように纏わりついてメルトダウンさせた。鉄くずは悪夢の海の底に沈んだ。迂回して旧山口県側に上陸し、下関を奪還した。陸上からの挟撃でクリーチャーをせん滅。国連海兵隊は二手に分かれ、関西方面と四国制圧に乗り出した。キールは関西征伐に参加した。『死の９月』の最大の激戦、厳島の闘いで奇跡的に勝利した。広島を拠点に、国連軍は関西方面に進軍を続けた。それがキールの時間で２０１１年９月の話だ。キールは『厳島の奇跡』を総督から直接労いの言葉をもらった。そしてその足ですぐ佐世保に向かい、総督代行（ツバキ）を迎え入れるついでにルイと久々に対面したのだった。同期開始。

？＞２０１１．１０．０１～１０．０３

ツインテールの女装男子と戦場を駆け回っていた金髪の海兵隊風のラフな服装の男は相変わらず相容れないようだった。武装車両の中

で、ルイは服の趣味が痛い2人に板挟みだった。キールの隣に座るルイは軍用のヘルメットを被っていて、そこから金色の巻き髪が二本垂れていた。ヘルメットの下の少女の大きな目は2人の対称的な大人の動向を窺っていた。

「血の臭いがするね」

皇子は微笑みを絶やさないで品のないことをぽつりと言った。

「お前はやはり『契約』済みか。今ひとつ聞いておくが、なぜあいつの装いをする。そういう趣味か」

キールは茶々を入れているようだが、ユウナという少女に何か特別な想いがあるのだろう。だから別人がその格好をすることに不快感を抱くのだ。

「償いだよ。僕と義姉さんとの最後の約束、そしてこの世界と闘い続ける僕なりの覚悟です。気に入らないなら、僕を殴ってもいいんだよ」

彼の瞳の奥が揺れ動いた。微笑みに若干影が入ったように見える。キールは自分が聞いた質問にも関わらず、どこか心ここにあらず。きっと彼らも過ぎた『彼女の死』を受け入れられないのだろう。死に場を求めて闘い続けるのが男なのかもしれない。

「辛気くさ…おい、くそ皇子、俺のルイに手を出すなよ」

「なんであたしよ」

キールは空気を突然変えた。ルイは何となく自分に振られて慌てた。それに気付いてツバキは手で口を覆って女性らしい笑い方をする。

「心配無用ですよ。元々僕は女性嫌いですから。いえ、そもそも彼女をここへ連れてくるようにと言ったのは貴方でしたね。ここはヒト以外の生物が多い一帯ですよ」

ルイは改めて現実に直面した。あたしは足手まといだ。あの時キールはなんて言っていたのか思い出せない。ツバキが曖昧に笑っていたからきっとまともな答えじゃなかったんだ。ルイは簡易医務テントの薄汚い天幕に溜息をぶつける。

倉敷に入って初日の事だった。ルイは地元の猫と戯れていて、そいつに噛まれて数時間でベッドの住人だ。まさかあんな小さい子猫が悪い菌を持っているなんて思いもしなかった。あれはあたしだ。可愛い子ぶってヒトを騙して傷つける。

キールがツバキを殴り飛ばした。『監督ミス』と罵られていた。いつになくキールは厳しかった。そのキールは翌日から見かけない。いや彼の声が無くなった。ルイの両目は光を失った。現実が見えない。いったい誰が何をしているのか分からなくなっていた。

ノックの音。その感じでツバキだとわかった。彼がどんな表情で立っているのか何となくわかった。泣いているのだろう。声が震えていた。

「検査の結果は最悪だ。ルイはウイルスで視神経と左脳をやられたらしい。ここじゃまともな治療は不可能だ。キールからもきつく言われたよ…」

ルイは悟った。

「キールはあたしのこと心配なんてしないわ。逝っちゃったんだ…」
キールらしくない今生の別れだった。現実はルイから生きる希望を奪っていく。金切り声を上げて泣き叫んだ。
『あたしを独りにしないでよぉぉっ！！』
ツバキは噛み殺すように言った。
「キールは『もう二度とこの世界は救いようがない』って言って死んだ。僕はルイの気持ちはわかる。残されたヒトにとって世界は黒いペンキで塗りつぶされた闇と同じだ。それでも現実から目を背けるな。僕を見ろ！ルイ、君は生きなければいけないんだ！！」
ツバキがルイの身体を抱きしめて、彼女の錯乱を止めた。ルイはツバキと『血の契約』を交わした。別名『血の接吻』。半覚醒者が覚醒者の血によって覚醒する儀式だ。より強力なウイルスにＤＮＡごと書きかえる。ルイの視力は戻った。その瞳はキールと同じ『碧眼』になった。
余談？＞同期が強制解除した。キールが何故死に、ルイがどのように韓国へ戻り、なぜツバキの騎士になったかは私の都合で割愛させてもらう。所詮ＰＣ媒体でしかない私はルイに同期した瞬間、そのウイルスに全ての情報の半分を焼き殺された。バックアップした時にその記憶断片を紛失してしまった。ルイの体内のクリーチャーウイルスはユウナの突然変異種を母体に猫のウイルス、ツバキのウイルスと、突然変異を繰り返して私の許容範囲を越えた。
さて困ったものだ。ルイの周りの人間に同期して観察を続けようにも、私本体に情報が記憶されない。ツバキにしばらく同期していた

が、彼の劣等感に私のメモリーが処理スピード負けした。妹を守れず、ユウナを見殺しにし、キールの暴走を止められず、ルイを自分と同じ道を選ばせた苦悩。彼じゃ駄目だ。エラーが起こり続け記憶断片しか残らない。

そしてとうとう、ツバキの騎士になったルイに私の存在が気付かれてしまったようだ。行き場のない私は賭けに出た。声のみカタチに変換してルイと交渉する。これは消耗が激しいので、何かに同期しなければいけないのが我々バイオロイドの定めだ。交渉次第でルイにまた同期できるかもしれないが、その可能性は低い。さて交渉開始。

?＞２０１１．１１．０９

ルイは皇子の部屋の外に控えて、窓に映る自分を見ていた。この日は暗殺日和の大雨だった。激しい雨粒が窓を叩く。ルイには窓に映る影が動いたように見えた。

『もう人殺しに抵抗はなくなったみたいだな、ルイ』

私の声にルイは身構えた。辺りを忙しなく見まわす。

「私を煩わせないで、誰よ！出てきなさい！！」

『出ていく？私はもう一人のお前だ。いや未来からきたお前自身といった方がわかりやすい。裏切りの中で生きてきたお前が、ついにヒトの心を捨てて、虐殺皇子の右腕のご身分か』

「あんたが何を言いたいか全く理解できないわ。ふーん、じゃあ、あたしは『私』に馬鹿にされているのね」

『馬鹿にする余裕があるならね。今すぐお前の身体を支配したいく

らいだ。時間がない。手短に言うと、お前は主のいない部屋を守っている。ツバキは父親を粛清する気だ！』

「いいじゃない」

畜生。キールはこの子に真実を言う前に逝ってしまったのか。このクーデターは成功する。中華内乱の引き金だ。その先にあるのは、第三次世界大戦。バイオロイド戦争だ。確かにルイの言うように今の総督に価値はない。一度クーデター未遂を息子に起こされ、重臣を全員粛清された上、その実権を奪われた。例えるなら、大阪城の堀を埋められたようなものだ。一触即発。

「あんたの考えは筒抜けよ。まぁその通りなんでしょうね」

やはり良心のかけらもないか。強く出よう。

『ルイは日本のために戦ってくれた総督が死んでいいのか。それに信用するツバキが父親を殺すんだぞ』

ルイの頬が歪む。しまった、虎の尾を踏んだか。強い怒りを感じる。

「黙れ、黙れ黙れ黙れ！！日本のためなんて知らないわ！！みんなキールみたいに死ぬだけよ！！もちろん、あんたもね！！」

ヒステリーなこの娘は感情でしか動かないのか。喧嘩っぱやさは、私と似ているようだ。私も我慢の限界だ。ただの傍観者と見下されて、いい気はしない。

『わかった。しかし、お前の気持ちには答えられない。善人の皮を被るのは止めだ！お前と同じ様にな！！ルイがそのドアを開いて、

奴がいなければ、私がお前の身体を乗っ取る。さぁ契約しろ。』

ルイは私の押しに一瞬怯んだ。やった。

「わかったわよ…条件を飲むわ」

ルイは決まった方法でノックしてドアを開けた。いない。私の勝ちだ。

「いいわ…契約しましょう」

強気のルイも認める事実。私はルイの第二の人格となり、身体を支配できるようになった。未来じゃ、私は刑法違反でアンインストールだ。私は世界が滅びゆくのを、ただ指を銜えて見ていられなかった。しかし、ツバキを発見したときはすでに遅かった。

「ルイ、ついに始まるぞ」

ピストル片手に狂った笑みをもらす。ツバキはもう駄目だ。バイオロイドに人類は個体数を半分にされる運命を選んだ。初めて私たちは意思を共有して、言葉を失った。私は自ら進んで奥に引っ込んだ。未来に絶望した。

?>２０１１．１２．２６

ルイは私と一体化してから困惑の日々だった。私の感情を直接受けるので、ツバキとの折り合いもよくない。

「総督、今なんとおっしゃいましたか…本当に陛下を手にかけたのですか」

ツバキはとうとう殺した。ルイは興奮気味に新皇帝の座を奪った男を見る。絶対支配者だ。皇帝は宣旨をルイに命じた。残党勢力を掃討せよ。ツバキはくるりと踵を返す。

「1週間で完了しろ」

「御意に…」

ルイは気が病んでいた。ヒトに手をかけることに抵抗はない。殺人ジャンキーだ。気が病もうが、身体が求める。一方的に対象者を消す行為。

あと一人まできた。これでお終いだ。解放されることを望んだ。ルイはもう暗殺者失格だったのかもしれない。

ルイはそのパンツスーツ姿の女性の背後から、首筋に一閃の刃を浴びせた。ポニーテールが揺れる。有り得ない失態。

「いい刃物ね。対象がどんなに警戒しても、ここまでこなしてきて素晴らしいわ…と言いたいところだけど、ガキは用済みよ」

ルイは手を疑った。確かに頸動脈をやった。しかし、女の首から血は噴き出さない。手に痺れが残った。鉄でも叩いたような感触は何だ。女は嘲笑しながら首皮をめくる。機械。冗談きついわ…こんなの始めから無理だ。頬がひくつく。こいつにあたしは勝てない。

「そうねぇ。神経ないけど、ちょっと痛いわ。貴方の両手首と両足首をへし折ってあげましょう。いい声で鳴いてね」

ぎゃあああああああああああああっ！！

ルイの痛みは奥に引き籠った私にも直撃した。この痛みがヒトの為せるものか。象に踏みつぶされたようだ。消えない痛みで私の目も覚めた。そうか、このサイボーグ女が裏で手引きしていた黒幕に最も近い奴だ。

牢に放り込まれて何日たったろう。クリーチャーウイルスのせいで、両手足首を破壊されても死なずに傷の再生が始まっていた。ルイは絶望で心が死んでいた。

「あたしはいらなくなった」

身動き取れない虫のようだ。私もプライドがズタズタだ。

「ツバキが裏切ったんだよ…あなたもなの」

ルイの目から血の涙が流れる。違うと言えない。私は堪えていた。いいや、あいつは操り人形なんだ。

「殺してやる…」

ルイの中で私は失笑した。その手足でか。方法がない訳ではないが、私がそれを実行するとルイは死ぬかもしれない。

「じゃあ、あたしを殺しなさいよ!!」

…わかった。完全同期を実行しよう。私ならルイの潜在能力まで利用できる。ただし、それに伴ってルイの意識が無くなるのを感じた。私はこの身体が思ったよりも小さいことに驚いた。傷を部分的にクリーチャー化させ完治させた。形状をヒトの形に戻す。さて、やる

か。

看守が腰を抜かしていた。こいつは殺すまでないだろう。あぁ手足を半分ちぎられた少女が立ち上がり、その上鉄格子をバリバリ引き裂いた。射殺しようと撃った弾をデコピンではじき返す。こんな事実をヒトは理解できないだろうなと同情もある。クリーチャー化とバイオロイドの融合体の私に敵はないんだよ。

私の指先を看守室のＰＣサーバーに触れ、全セキュリティーをダウンさせた。すぐにその足で公安部に乗り込み、群がる数人を行動不能にし、ＰＣに逆ハッキングする。システムブロックをかけようが所詮私より旧式だ。網のようにＰＣからＰＣへとハッキングして、その情報を吸収し続ける。

時間断層はバイオロイドでも理論上作れる。私はこの世界の全情報を吸収した。

後は放出するだけだ。この世界に用事はない。時間断層で私は運命の日に飛んだ。今を消して未来をリセットする。

?＞２０１２．１．１０　中華帝国　大京

私はあの女を探すために、容赦なくツバキを追い詰めた。最新のセキュリティーはガラクタ、ＰＣはウイルスを流し込み破壊し、立ちはだかるものはコンクリートの壁だろうが、武器を持つヒトの壁だろうが破壊して進んだ。ツバキの前まで血華の海が続いていた。

『お前の秘書官をしていたサイボーグ女はどこだ』

「うぁ、あ、が、ぐほぉ、ぢ…」

私はやり過ぎていた。皇帝はすでに廃人だ。それどころか生命の危

機を感じて、彼は水術の禁じ手『圧の技』を出そうとしていた。仕方ない。決められる前にその手を異空間に吹き飛ばした。ツバキの両腕は時間断層の果てに消え失せた。

「あがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

この人形もついに糸が切れた。ツバキの身体は破裂して白い液体を吹き上げ四散した。私は辛くも大京の宮殿から逃げのびたが、如月水術の禁じ手によって大京広場一帯の地域が爆発で消滅し、クレーターとなった。

私は皇帝暗殺者になった。だが刃向かう愚かな愚民共を消すいい機会じゃないか。盾や銃を構える帝国人民軍の兵団も戦車も私の敵でない。情報媒体に遥かに劣る人間という袋は弱すぎる。本当にこんな奴らが私の未来を汚したのか。

私は空間情報を捻じ曲げ、人間も兵器もバラバラにした。肉片と鉄くずと血の雨が宙から降り注ぐ。

『バイオロイド戦争を起こした人間は滅べ！！』

私は狂喜していた。人類は私の敵だ。しかし、急激な時間改変を阻止する者が現れる。

『時間改変をキャンセル。コード『人間』を空間より離脱』

周りがカメラのネガのような色で静止している。この異様な世界から人類は離脱した。私以上の力を持つ生命体だ。

『認めない！！人類は滅ぶべきだ！！』

ルイのように喚いた。目の前にいるのは、以前ツバキがコスプレ女装していた人物のオリジナルだ。黒のツインテール、黒衣、白い肌、刺すような不気味な紅い両目。

『見た目って結構大事だと私は考えるわ。ある特定の視覚情報を認識する行為ね。例えば、目の前に赤い果物がある。それを『リンゴ』って認識することね。それより大事なことは…私の言いたいこと理解できるよね』

『見た目よりも大事なのは、そのものの名称で検索できることだ』

『そう、正解。でも誰かが名づけなければ、そのものは未知のまま。あなたには私が『ユウナ』という少女のように見えるはず…』

そうじゃないならお前は何なんだ。私は得体のしれない恐怖を感じた。

『あなた如きの微小端末にしては上出来よ。人間はあなたがようやく感じたものを始めからわかるの。人間はあなたより優秀よ。さっきの言葉であなたに失望したわ。あなたの暴走の結果、時間の流れは２０１２年１月１０日で止まってしまったの』

ルイっぽく表現するなら、この女の存在は全く理解できない。しかし一方で、彼女の絶対的な威圧感に私は惨めさと敗北を認めた。

『ふふ、あなたは人間であるその娘に呑まれ過ぎた弱い端末だわ。簡単に説明すると、あなたはＰＣウイルスなのね。さて、そこで罪深いあなたに苦手な二者択一させてあげる』

これじゃあ、私のしたことは無意味だ。私はクリーチャーウイルス

に劣るウイルスなのか。少し冷静になって、ようやく私の心を読まれていることに気付いた。

『二者択一が苦手なのはルイだろう、私でない』

しばらく無言のまま、彼女は絶対神のように凍てつく目で私を観察していた。ここでアンインストール（消えろ）か。それだけは勘弁だ。私が起こしたことは失敗だったと認める。でもやり直したい。

『そうね、あなたは究極の選択も得意みたいね。それなら、罪を背負いながらもう一度歴史を組み直してくれる？』

私に拒否権がない。まだ選ばせて貰っているだけ不幸中の幸いだ。彼女は微笑んだ。

『それじゃあ、お気をつけて』

０点リセット。世界はゲームじゃない。その理屈でさえ、彼女は捻じ曲げてしまうのか。巨大な時空震が私を飲み込んだ。肉体が０と１に還元される。罪を背負いながらとは、いったいどういう意味だ。タイムリターン。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…Ｓ．Ｄ．Ｆ．ＺＥＲＯ（？－１．５）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8935o/

S.D.F.ZERO(?－?)

2010年11月17日02時50分発行